

江戸の改革者 ～田沼意次・蔦屋重三郎・松平定信～

植村美洋

<田沼意次>

1 生い立ち

田沼意行^{おきゆき}の長男として、江戸に生まれる(1719年)

意行・・・紀州藩主徳川吉宗の家臣 → 旗本(600石) 吉宗の小姓

2 経歴

①9代将軍家重の小姓 → 御用取次見習(2000石) → 御用取次(5000石)
1758年9月3日 → 大名(1万石)

②10将軍家治の御用取次

1767年(明和4) 2万石 側用人 相良城の築城

1769年(明和6) 2万5000石 側用人兼務の老中格

1772年(安永元) 3万石 側用人兼務の老中

3 出世の理由

①「奥の権力」・・・側用人は将軍と老中以下の諸役人をつなぐ役目

②「表の権力」・・・老中は五人前後で、同役や部下と評議し、将軍に伺いをたてる

◎奥と表の権力を兼ねた前例のない権力者

4 人脈・党派の形成

①意次の妻・・・伊丹直賢^{なおかた}の娘 直賢は一橋家の家老 → 大目付

直賢の孫は、意次の弟意誠^{おきのぶ}の子意致^{おきむね}の後妻

②意次の弟意誠^{おきのぶ}・・・一橋家の家老

③意次の長男意知^{おきとも}の妻・・・老中松平康富^{やすよし}の娘

④意次の次男意正^{おきまさ}・・・老中水野忠友の養子

⑤意次の三女・・・横須賀藩主・奏者番西尾忠移^{ただゆき}の妻

⑥意次の四女・・・与板藩主・若年寄井伊直朗^{なおあきら}の妻

⑦意次の七女・・・側用人大岡忠光^{ただよし}の子忠喜の後妻

⑧意次の六男雄貞^{かつさだ}・・・薦野藩主土方雄年^{こもの}の養子

⑨意次の七男隆祺^{たかよし}・・・綾部藩主九鬼隆貞^{たかさだ}の養子

5 幕府権力の掌握

①大奥とのつながり

②家臣の姻戚関係

③美濃郡上一揆^{ぐじょう}の処理 → 政治能力を認められる → 大きな出世の契機

6 政策

<江戸時代の経済のしくみ>

◎幕府も藩も農民から米(年貢米)を徴収し、この収入で運営し、武士に給与として

米を支給する → 米を基本とする自給自足の経済

経済の発展 → 商人の隆盛 農民・武士の困窮 幕府・藩の財政窮乏

(1) 利益追求型の政治 → 「国益」重視

革新的・積極的経済政策

- ① 鉱山振興策・・・平賀源内の鉱山開発 → 「山師」の横行
- ② 殖産興業策・・・朝鮮人参の国産化、白砂糖の国産化
- ③ 運上・冥加金の上納・・・商業資本の活用と税の徴収
- ④ 民間からの献策 → 商人との癒着

(2) 全盛期の政治

- ① 南鐮二朱銀の発行・・・貨幣の統一
- ② 印旛沼の干拓・・・3900町歩(3900ヘクタール)の新田開発計画
- ③ ロシア交易と蝦夷地の開発・・・鉱山開発、新田開発、ロシアとの貿易

7 宝暦・天明期(田沼時代)の文化

- ① 平和な時代と経済的発展 → 文化の発展
- ② 蘭学の発展
- ③ 意次の遺訓 「学問と武芸に心掛けさせる」 → 余暇に遊芸を嗜むことは自由
川柳・狂歌・和歌・俳諧・絵・芸能の発展 → 蔦屋重三郎の活躍

8 人間性

(1) 素顔

- ① 家治の意次評・・・「またうど」の者なり → 正直、律儀
- ② 世評・・・「はつめい」 → 学問や知識などにすぐれた人
慇懃 権勢を誇らず 物腰の柔らかい 気配り・心遣いのできる人

(2) 賄賂政治家の評判

- ① 商業資本の積極的活用 → 商人との癒着 口利きの流行
- ② 新興の成り上がった身分
田沼家に家法なし → 家臣の規律の甘さ → 賄賂の可能性
- ③ 定信側のプロパガンダ

9 失脚と死

(1) 田沼意知の死

- ① 1784年 田沼意知の死 ← 佐野政言の刃傷
- ② 1786年8月25日 将軍家治の死
- ③ 1786年8月27日 意次の老中辞任
※田沼派の縁者、田沼家との義絶を申し渡す

(2) 処罰と死

- ① 1786年閏10月5日 2万石没収 ← 5万7000石
神田橋上屋敷と大坂蔵屋敷の返上 謹慎
- ② 1787年10月2日 2万7000石の没収 隠居・謹慎
→ 孫の意明に1万石 相良城は没収
越後頸城郡と陸奥信夫郡下村(現福島市佐倉下)
- ③ 1788年1月～2月 相楽城の取り壊し
7月24日 意次の死(70歳) 駒込勝林寺に埋葬
9月 意明、川普請役拝命 6万両を幕府に徴収される
※城の破却は、1695年(元禄8)の大和郡山城・飛騨高山城以来の92年ぶり

< 葛屋重三郎 >

1 生い立ち

(1) 両親の離婚と養子

- ①誕生 1750年(寛延3) 本名・柯理からまる 通称・重三郎
②養子 父丸山重助と母広瀬津与の離別つよ → 吉原の茶屋「葛屋」(喜多川氏)へ

(2) 葛重の育った吉原

- ①元吉原 1617年(元和3) 日本橋に開設
②新吉原 1657年(明暦3) 日本堤(現台東区千束)へ移転
東西約355メートル 南北約266メートル 2万8千坪
③概要 人口(8171人) 遊女(2105人) 禿かむろ(941人) その他
日本一の遊郭であり、江戸文化の交流地・発信地でもあった

2 書店の開店

(1) 貸本屋から耕書堂開店こうしよどう

- ①重三郎の義兄の葛屋次郎兵衛の店先に開店
②「吉原細見よしわらさいけん」(吉原のガイドブック)の販売・出版で成功
③ヒット作の出版
「一目千本」「青楼美人合姿鏡せいろうびじんあわせすがたがみ」「富本とみもと」の正本・稽古本
④作家・画家との交流
作家・・・朋誠堂喜三二(平沢常富) 恋川春町(倉橋格) 山東京伝(北尾政演)
四方赤良(大田南畝) 石川雅望(宿屋飯盛) 曲亭馬琴
十返舎一九
画家・・・北尾重政 北尾政美(鋏形蕙齋) 喜多川歌麿

(2) 日本橋へ進出

- ①日本橋通油町へ書店を開店 1783年(天明3) → 一流の本屋
②江戸のメディア王としての活躍
○黄表紙の出版 青本・黒本から派生した、風刺滑稽の絵入り大人向け小説
恋川春町『金々先生栄花の夢』 朋誠堂喜三二『娼妃地理記』
○洒落本の刊行 遊里での通人の遊びなど、滑稽と通を描く小説
山東京伝(北尾政演)『江戸生艶気樺焼』
○天明狂歌の隆盛 和歌のスタイルで、諧謔・滑稽・風刺の精神を詠んだもの
葛重のプロデュース 狂歌会・イベント主催 → 狂歌の流行
四方赤良(大田南畝) 手柄岡持(朋誠堂喜三二) 酒上不埒(恋川春町)
唐衣橋洲 朱楽菅江 葛唐丸(葛屋重三郎)
○喜多川歌麿(浮世絵師)の売り出し
葛屋に住まわせて、美人画を描かせる → 美人大首絵のヒット
○吉原の宣伝
吉原を単なる遊郭ではなく、文化サロン・文化の発信地とする

3 幕府の処罰

田沼意次政権 → 松平定信政権の寛政改革・・・奢侈禁止、儉約令、文武奨励
出版統制、学問統制

○改革を風刺する黄表紙の大ヒット

「世の中に蚊ほどうるさきものはなし ぶんぶといふて夜もねられず」

「白川の清き流れに魚すまず にごる田沼の水ぞ恋しき」

○幕府の統制

朋誠堂喜三二作『文武二道万石通』

平沢常富(秋田藩江戸留守居役) → 江戸から国元に帰る → 活動自粛

恋川春町作『鸚鵡返文武二道』

倉橋格(三河小島藩年寄本役) → 幕府の出頭命令 → 自殺?

◆幕府の処罰 1791年(寛政3)

●山東京伝 → 手鎖50日

三部作・・・『娼妓絹籠』『仕懸文庫』『青楼昼之世界錦之裏』

処罰の理由・・・以下の幕府の触れ書に違反したと考えられる

「好色本之類は～絶版にすべし」

「古代の事にたとえてけしからん内容を作り出す事例を、今後はおこなってはならない」

●葛屋重三郎 → 身上半減(身代半減)・・・身上(資産)に応じた重過料(罰金刑)

三部作を出版した責任

4 経営転換

○東洲齋写楽の売り出し

歌麿と疎遠になる → 写楽に大首絵を描かせる

写楽はデビューからわずか十ヶ月で姿を消す

○曲亭馬琴と十返舎一九を売り出す

曲亭馬琴を葛屋で働かせる → 『南総里見八犬伝』

十返舎一九を葛屋で働かせる → 『東海道中膝栗毛』

○学術書の出版に力を入れる

幕府の文武奨励 → 学問ブーム → 学術書の販売

伊勢松坂の本居宣長のもとに行き、『玉勝間』の販売の許可を得る

5 最期

○病に伏す 1796年(寛政8)秋頃、脚気となる

○最期 1797年(寛政9)5月6日

12時に死ぬと、自ら予告する

「自分の人生は終わったが、いまだ命の終わりを告げる拍子木がならない。おそいではないか。」(『江戸の本屋さん』今田洋三)

～ 夕刻に死す～

○墓 正法寺(台東区)

墓碑 石川雅望の「喜多川柯理墓碣」

大田南畝の「実母顕彰の碑文」

<松平定信>

1 生い立ち

- ①八代將軍徳川吉宗の次男田安宗武たやすむねたけの七男 → 將軍の孫としての自覚・矜持きやうじ
②人間性・・・自律心 勤勉 清廉潔白 學問に傾倒 世間の評価への強い意識

2 松平家への養子

- ①白河藩松平家の強い要望・・・継嗣が必要 家格を上げたい
②田沼意次はるさだと一橋治済はるさだの意向

3 白河藩政

- (1)天明の飢饉対策 → 藩政改革の実績 → 藩主(政治家)としての評価が高まる
(2)政策研究会の形成
○名君との交流・・・細川重賢(熊本藩主) 上杉治憲(米沢藩主)
○後の幕閣・・・本多忠壽ほんただかす(泉藩主) 松平信明のぶあきら(吉田藩主) 板倉勝政(松山藩主)
大岡忠要ただとし(岩槻藩主)

4 寛政改革

(1)松平定信政権の誕生

- ①一橋治済・御三家、定信を老中に推薦 1786年(天明6)12月
→ 田沼派の抵抗 大奥の反対
②江戸の打ちこわし 1787年(天明7)5月20日～27日
③定信、老中首座に就任 1787年(天明7)6月19日

(2)寛政改革の性格

- ①改革の覚悟 霊巖島吉祥院れいがんじまきつしよういんへ願文奉納 1788年(天明8)正月2日
民の暮らしのために、自分の命だけでなく、妻子の命も懸ける決意
②幕藩体制の構造的危機の克服 ← 強い危機意識
農村の荒廃
士風退廃
商人の台頭

(3)経済政策

- ①物価対策 ← 「物価論」(定信の著書)
○物価騰貴しやしの根源は奢侈 → 儉約令・風俗統制
○金銀相場の不均衡 → 貨幣政策
○生産者の減少と消費者の増加 ← 農民の都市流入、米生産の停滞
○商人の米価操作 → 物価引き下げ
②南 鐐二朱銀なんりょうにしゆぎんの流通・・・田沼政権の経済政策の継承
③棄捐令きえん・・・札差ふださしの債権(118万両)を放棄させる → 旗本・御家人の救済
→ 士風の退廃を立て直す → 幕府の安定
④会所設立・・・勘定所御用達(10人)を任命し、公金貸付を行わせる
○米穀商人を排除し、大名貸などをおこなっていた新興商人を重用
○札差に事業資金を貸し出す

(4) 農業政策

- ①農村の復興・・・一揆の防止 財政再建(年貢米の安定的収納)
→ 公金貸付、^{がこいもみ} 困 粃
- ②旧里帰農令・・・江戸に出てきた農民を農村に帰す
→ 農村復興と江戸の治安対策
- ③代官の刷新・・・不正代官の処罰 新任者の抜擢
※^{てらにしたかもと} 塙代官寺西封元などの登用

(5) 社会政策・都市政策

- ①七分積み金・・・「^{まちいりよう}町入用」の節約 → 備蓄米の購入・米価対策(物価対策)
 - 節約分37000両の70%を備荒貯蓄のための積金へ
 - 江戸の町人(約50万人)1か月分の米の備蓄
 - 天保の飢饉の時に打ちこわし起きなかった
 - 米価の安い時に米を買い、高い時に売り出して米価調整
 - 20%は地主の取り分、10%は町入用予備費
- ※明治時代まで継続され、この積金で東京のインフラ整備、学校の建設が行われた
→ SDGs
- ②人足寄せ場の設置・・・石川島の埋立地に無宿人を収容し職業訓練をさせる
→ 無宿人を収容して打ちこわしを防ぐ、社会更生
常陸筑波郡上郷村などにも設置 荒れ地の復興
※運営は、長谷川平蔵(火付盗賊改)にやらせる

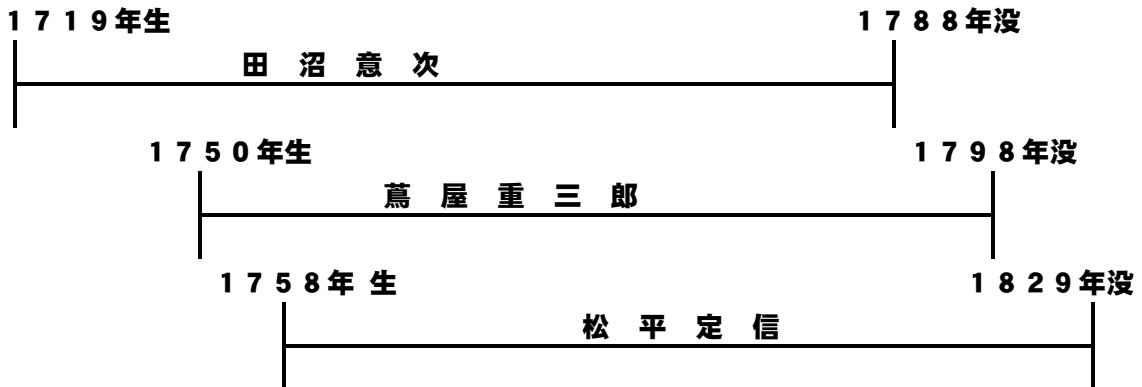
(6) 文化政策

- ①出版統制令 ← 風俗の乱れや幕府批判の取り締まり
 - 好色本の絶版
 - 時世を風刺する黄表紙の出版、写本類の貸本の禁止
 - 出版業者の相互吟味 → 検査と自主規制
 - 林子平の処罰 ← 蝦夷騒動など対外問題の人心への影響
- ②学問統制
 - 文武奨励により、旗本・御家人の風俗統制
 - 寛政異学の禁
 - 湯島聖堂においては、朱子学以外は禁止
 - 全国の藩校などに波及
- ③風俗統制・・・奢侈品の製造・販売禁止 混浴の禁止
→ 不景気 → 庶民の反発 → 抑えるために法令を乱発 → 庶民の反発

5 老中辞任

- (1) 定信の独裁 ←→ 本多忠籌・松平信明との確執
 - (2) 世間の不満 ← 儉約令、風俗の統制など
 - (3) 将軍家斉との対立・・・家斉の成長 実父治済の大御所問題
 - (4) 朝廷との対立・・・光格天皇の実父を上皇と称する問題
 - (5) 老中解任・・・1793年(寛政5)、老中と将軍補佐役を解任される
- ◎定信の老中辞任後 → 改革政治は継続される

<田沼意次・蔦屋重三郎・松平定信の生きた時代>



<徳川家系図>

